

平成26年度 学校関係者評価(結果)

学校番号	学校法人静岡理工科大学 静岡北中学校	記載者	廣住雅人
------	--------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 平成26年度も平均的な数字での自己評価がなされた。各項目で、それぞれ満足のいく点も不満も残る点もあったが、大方の目標は教職員の努力によって、ほぼ達成できたものと考え。とはいえ、ようやく平成27年度に完成年度をむかえる本校としては、まだ様々な面で試行錯誤を繰り返している状況もみられる。その点が教職員の意識の差異にも表れていると判断される。高等学校との6年間の教育の中で、中学校がどのようなミッションを果たすべきなのか。完成年度で、今一度振り返るべきであろう。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 学校経営方針を実現するための教育活動の展開及び教育環境を構築する		3	特色ある教育活動を展開する学校としてやってきたが、プログラム・環境共に安定感が出てきた反面、新鮮味が薄らいできた。	継続して、本校でなければ展開できない教育プログラムの開発・展開をしていくことは必要だが、取捨選択をしていく必要がある。
2 目標生徒数を獲得する		4	学則定員を充足することはできなかったが、数の確保から、人数を絞り込んでも高いレベルの生徒獲得の方向性に向けて一歩前進した。	学則定員数を獲得することは言うまでもないが、学校に対する評価を高めるためにも、より優秀な生徒獲得の方向性に向けて一歩前進した。
3. 進路実績の向上を図る		3	高校進学時に高いレベルの学科に進学できる力をつけるために、ベネッセの学力推移調査でもBランク以上に入るよう目指したが、大きく伸びた生徒と伸ばしきれなかった生徒が出た。	高等学校進学に対する意識啓発を早期段階から行い、学習に対して自ら目標を持って取り組む生徒を育成していく。
4. 法人傘下の中学校としての使命を果たす		3	内進生として静岡北高等学校に優秀かつ目的意識の高い生徒を進学させるべく指導したが、学力差についても幅が出てしまい、全員を進学させることができなかった。	入学時点からの成績も関係するものがあるが、将来のビジョンをしっかりと持たせ、目的意識を持って取り組む学習集団を形成していく。
5. 学校評価を高める教育プログラムを展開する		3	開校当初から特色づけているプログラムに関して、毎年教授法に対しての工夫をしているものの、ややルーチン的な感覚になりつつある面も否定できない。	原点に戻り、現在ある教育プログラムの見直すことで、本校にあったスタイルを確立すること。加えて、新たなプログラムや教育手法に対する研究・開発を進めること。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	SSH活動だけでなく、他の学習活動や生徒の活動においても社会的な評価を得られるような取り組みを積極的に進めていくことが必要。その中で、本校独自の更なる教育プログラムを模索していく。	SSH活動が中学校のプログラムとしてはいつ2年目になり、各学年において学年相当のプログラムをこなすことができ、中学レベルを超えると評価される成果を残せた。CASEや言語技術のエッセンスは、徐々にSSH活動や各教科学習の中に反映されつつある。	4	SSH活動の中で、各教科において、開発してきた手法を活かす工夫がなされた。担任主導のディベートを取り入れたりするなど、多くの教員が関わった点は評価される。	言語技術やCASEの授業において、本校にあった形のものプログラムとしてまとめ上げられたり展開されたりしているが、担当教員のスキルに頼るところにとどまっている。中学として、共有することで、より発展させていくことが必要。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	第3期生を高等学校に送り出すにあたり、高校側との関係を密にするよう、会議体も一緒に運営するようになり、互いの状況がいまどようになっているかといったこと、更には双方に対する関心を高める。	第2期生は、個々の目標にあった学科に進学することができた。しかし、中高連携推進委員会を中心とした高校との意見交換の場、あるいは意識の共有化に関しては、確実に行うことができなかった。	4	第3期生を高等学校に送り出すにあたり、高校側と会議体も一緒に運営するようになり、情報共有がしやすい環境にした。進路に関しては、3期生を個々の生徒にあった学科選択で送り出すことができた。	高校との情報の共有化を図れる状況に改善はしてきているものの、まだ双方の状況を十分に相互理解するまでには至っていない。義務教育段階の中学とそうでない高校の違いはあっても、譲歩と理解をする意識を持つことが必要。
生徒指導	健全な高校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	個々の生徒の状況把握を、全教員が確実に行い、直接に関係する教員だけがかかわるのではなく、学校を上げて一人ひとりの生徒の成長を促す指導体制を作る。	学年部での個々の生徒指導に関しては、よく先生方の指導の跡がうかがえたが、多感な時期の生徒を相手にしているため、短期間に効果を上げることはできなかった。情報を共有したものの、全体での指導に関しては、課題が残った。	3	中学内における生徒の状況把握については、ケースによっては、中学教職員で指導する理解ができており生徒の成長を見たが、いまだ各学年での個別対応によるものが多く、一丸となった指導体制はまだ確立されなかった。	目的をもって実施している会議体があるなら、そこでの情報の共有化をすべく機能させることが必要。ルーチンで開催している会議体で有意義な情報交換がなされないのであれば、精査することが求められる。

進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、	早い段階において、3年生の学習状況や進路希望に関する情報に関して、高等学校側と情報を共有化し、個々の生徒にとって一番最適な進路選択ができるような指導体制を作る。	昨年度の反省にのっとり、最終的な学科選択の時期を下げたものの、最後まで気持ちが揺れる生徒は残ってしまった。先取り学習に関しては、計画通りに実施できなかった点に反省が残る。	3	昨年度までの反省に基づき、3年生の進路指導のスケジュールに関しては、予定通りの会議を組み、高校と情報交換をしながら、3年部は個々の生徒に見合った学科選択をさせることができた。しかし、いまだ高校との意識差があった。	高校との情報共有化に関しては、中学側と高校側でのギャップを解消する必要がある。中学校の実態に即した進路指導体制を進めていくのか、中学から進学する生徒を6年まで育てるかを、さらに踏み込んで検討することが必要。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険箇所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	保護者の協力のもとにメールアドレス登録を行っているものの、保護者の保有するキャリアの問題、メール設定の問題などで100パーセントの保護者に一斉配信のメールを送れていない状況を、早く改善する。	学内だけで利用する保護者一斉メールを、機能させることができ、行事などの連絡方法として利用することはできたものの、保護者からの意見を吸い上げるような活用方法まで検討できなかった。	3	保護者の協力のもとにメールアドレス登録を行い、中学独自で保護者に一斉配信のメールを送れる環境を整備しているが、本年度も100%保護者にメールが配信できる環境にならなかった。	学校独自の一斉配信のシステムも確実なものにしなければならぬが、法人として取り組んでいる安否情報確認システムもあまり機能しているが、この利用も視野に入れ、情報伝達が確実にできる方策を検討したい。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に行う。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	引き続き、生徒の健康管理に関する体制を整えと共、運動部のみならず文化的な活動に関しても積極的なアプローチをしたい。	年間行事計画にある各種兼新計画は、予定通り実行された。部活動の成果としては、空手道部が昨年に引き続き全国大会出場の結果を残し、バドミントン部も中部の中学校の上位行に位置付けられるような成績を残すまでに成長した。	3	生徒の健康管理については、養護教諭と担任との情報共有はできていたものの、教科担当まで伝わっていないケースが若干みられた。空手道部は男女とも全国大会出場し、女子団体は準優勝した。バドミントン部も県大会出場した。	生徒の健康留意点に関しては、全教職員で共通理解をしている状況を持たなければならない。また、部活動に関しては、今までの成果以上のものを常に求める意識を持ち活動していくことが必要。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が業務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から行い、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	高校と運営委員会・職員会議を合同で行うように会議形態を変化させ、中学での案件は、中学部会で検討したうえで、運営会議に諮っていくといったスタイルに変えていくことで、高校教員との情報共有を、しやすい会議形態に移行する。	中学における会議形態としてある中学部会、教科担当部会、運営・職員会議、成績会議などは定期的に行われ情報交換は行ったものの、高校教員との情報の流れがあまりよくなかった。	3	高校と運営委員会・職員会議を合同で行うように会議形態を変化させ、中学での案件は、中学部会で検討したうえで、運営会議に諮っていくといったスタイルに変えていくことで、高校教員との情報共有を、しやすい会議形態に移行したが、中学の意見が反映されていないといった意見も残っている。	会議体は必要なものだけに精査し、どの会議がどういった性格のものであるかを教職員が共通理解し、それぞれの会議に全員で臨む姿勢が必要。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	内部・外部による学習に関する取り組みに関する分析・検討を定期的に行いながら、生徒の学力向上のために、自分たちが次に何を目標としていくべきかを、常につかんでいる環境を作る。	内部での分析検討会は、学期に一回行うようになってきたが、外部からの問題指摘の機会が少なくなりました。	3	学習に関する取り組みに関する分析・検討を定期的に行いながら、生徒の学力向上のために、自分たちが次に何を目標としていくべきかを、常につかんでいる状態を作っていくことは心がけていた。しかし、日常業務の多忙さとスタッフの数が少ないこともあり、外部研修に出て研鑽をつむ機会が持てなかった。	学習成果に対する外部からの客観的な評価を聞く機会を作ることに、外部研修に出ていくように、時間と人的な問題をクリアしながら進めていくことが必要。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	地域に根差した学校となるためにも、地域住民との交流をする機会を作りながら、学校に対する意見・評価を聞く機会を設ける。	多種多様に及ぶ保護者からの要望を精査し、その中でいかに対応していくかについては、個々のケースごとに考えていくことができた。保護者との協力関係に関しては、大方よい関係を作り上げたが、一部問題を抱えた。	3	SSH活動を通して、行政や地域とのコラボレーションをする機会を多く持つことができた。その結果、徐々にではあるが地域に根差した学校となる基盤はできた。	大人社会だけを対象とした地域からの評価だけでなく、地元の小学校との交流活動などを通じて、本校の存在を地域において強く出せるような努力をしていくことが必要。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	様々な学校施設を、生徒たちの教育活動において、効率よく有効活用をする。	高校生と比較して、中学生の図書館利用率は高いものがあつた。また、日常の教育活動における理科室やパソコン教室の利用を、積極的に行なった。	3	日常生活における読書のための図書館利用、プレゼンテーション能力向上のためのパソコン教室利用、SSH活動における理科室の活用等、様々な学校施設を、各教育活動において有効に活用できた。また、懸案であった1年生の教室配置を変更できた。	今後の教育活動の中で、本校がスタートした時点で持っていたICT教育のさらなる発展形態を考えることは必要である。そのためにも、ICT教育の現状と将来展望をかんがみながら、本校としての提案と環境整備をしていくことが必要。
総合評価					3		